

秋に植ゑし山法師の花咲き盛り朝朝仰ぐこの夏嬉し (R)

大石田の魚屋さん・・・

「大石田にはお魚屋さんがたくさんあったよね。」と不思議そうに聞かれます。最上川沿いの通りには、六軒ほどの店舗がありました。それぞれのお店には広くお得意様がいて、御用聞きをしたり、店先で旬のおいしい魚をすすめたりして注文を伺います。大石田周辺の人々は内陸にありながらおいしい魚を十分に食べていたようです。季節、季節に少しの贅沢を楽しんでいたのではないのでしょうか。職人、船頭、商人、農家などの家々では、験を担いだり風習を重んじたりして生活してきました。昔も今も旬の物は何よりのご馳走です。町内外の地方から産物や人がたくさん集まった、威勢のいい大石田河岸の名残です。

「なんぼだったす(いくらですか)。」なんぼと値段を聞くのは北海道、東北、北陸、西日本、特に近畿地方の方言ようです。舟運文化が栄えた江戸時代、芭蕉さんが来町する元禄の頃は大石田付近の最上川を毎日五百隻余りの舟が大石田の川港かわみなとを上り下りしていました。物流の拠点として、商人の町として栄えた小さな町は文化を育て、教育に熱心で人を育てる風習がありました。酒田を経て上方文化が伝わり、学ぼうとする向上心が培われ、そして来訪者から何かを学ぼうと、お客様を大事にする気風が生まれて来たように思えます。

・・・

蛙始めて鳴く(かえるはじめてなく)

5月5日～5月9日頃

山菜が出初める時期、我家の裏庭にウコギの新芽が出ます。枝にはトゲがあり摘むのに大変ですが抗酸化に優れたものです。新芽をさっと茹でざみ、炊き立てのご飯にのせ醤油を少々。鮮やかなウコギご飯です。昔は苦くて食べられなかったのが今はほのかな苦みを味わっています。毎年我家の春の味です。(み)

蚯蚓出ずる(みみずいずる)

5月10日～5月14日頃

小さかった頃から母の日はありましたね！思い出すのは妹と2人でちらし寿司を作った事です。玉子焼き、のり、しいたけの佃煮、そぼろ等を大皿に装った酢飯の上になぜかくるくる輪の状態置いていく。頂上には紅ショウガをのせ完成です。畑から帰ってくる母の喜ぶ顔が見たくって頑張ったものです。(と)

竹笋生ず(たけのこしょうず)

5月15日～5月20日頃

16日(新暦)は300年以上昔芭蕉が「おくのほそ道」へ旅立った日。1960、70年代、未知の憧れや自分探して世界中を放浪する若者がいっぱい。小田実、五木寛之、沢木耕太郎、村上春樹は若者達の参考書でもあった。オデッセイとは波乱に満ちた旅のこと。戻る場所があつてこそ旅。故郷大石田の未来とは…。(木霊)



2015.5.6 聴禽書屋(ちょうきんしょおく)とおきな草

読書会だより①9

大石田七十二候読書会・大石田町立図書館

大石田の立夏のころ

七十二候より

髪の毛のカットに美容院に行くと、美容師さんのYさんがとてもうれしそうに言いました。「何十年ぶりに燕が帰ってきて、巣を作ったのよ」と。私もうれしくなって見せてもらおうと、玄関脇の高い所に、あの形の巣がありました。巣の下の部分は、ドロがすっかり乾いて、白く固まっており、上部三分の一ほどは、まだ黒っぽく、いかにも柔らかそうです。制作中の巣を見たのは初めてです。二羽の燕が、代わる代わる低く飛んで警戒していました。

(い)